

## 藤原耕二会員の平成 25 年度文部科学大臣表彰 科学技術賞（理解増進部門）受賞に寄せて

東京工業大学大学院情報理工学研究科  
小島 定吉

昨年の 4 月に東北大学大学院情報科学研究科から京都大学大学院理学研究科へ異動した藤原耕二さんは、このたび京都大学の「滞在型プログラム JIR による数学研究の社会への理解増進」と題する推薦が科学技術への貢献として評価され、文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）を受賞した。藤原さんの研究業績をよくご存知の方はもとより、多くの数学会会員は藤原さんがなぜ【理解増進部門】で顕彰を受けるのか不思議に思われるかもしれない。そこでまず、受賞対象となった JIR について簡単に説明しておきたい。

JIR は Journalist in Residence の略称で、藤原さんによれば、広い意味でのジャーナリストの方々に数学関係の専攻や研究所、あるいは研究室等に一定期間滞在いただき、その取材や滞在経験を報道や著作活動に反映させていただくことを目指したプログラムである。そもそもはバークレイの MSRI（数理科学研究所）が 1998 年に始めた企画で、

<https://secure.msri.org/activities/pastprojects/jir/index.html>

でその歴史を辿ることができる。MSRI は同プログラムを 2005 年まで 7 年間続け計 11 名を受入れたが、現在は募集を停止している。

藤原さんがこのアイデアを日本で実現しようと考えたのは、おそらく AMS Notices 2010 年 5 月号に出版された「The Housekeeper and the Professor（小川洋子著「博士の愛した数式」の英訳）」の書評を書いていた頃だろう。Notices の実質的な編集者である Allyn Jackson 女史は MSRI の JIR プログラムの 2 人目の参加者であり、藤原さんは日本版 JIR を企画するにあたり彼女にいろいろ相談したそうである。その後、当時本会の理事長であった坪井俊さんに相談を持ちかけ、後援を得て 2010 年に日本版 JIR を立ち上げた。これまでの活動実績は

<http://www.math.kyoto-u.ac.jp/~kfujiwara/jir/jir.html>

にある。

藤原さんが始めた日本版 JIR は、MSRI のような一つの機関の企画ではなく日本の数学関係の機関に受入を募り、受入れ可能な機関のリストを見てジャーナリストが応募するという形式をとっている。当初は文字通り報道関係者、出版関係者、フリーライターが参加したが、3 年を経て延べ 24 名の受入を果たし、応募される方の職種も徐々に広がった。昨年度は写真家や理系漫画家、また初の外人として NY Times の記者も参加している。こうした活動は数学研究の社会への理解増進にたいへん貢献が大きく、今回の受賞につながった。理解

増進部門の他の受賞者，グループは社会へ直接働きかける活動が対象となっているが，JIR は社会へニュースを流すソースへ間接的に働きかけるアウトリーチ活動という点でユニークであり，根源的という意味で数学らしさに喝采するのは私だけではないだろう．

京都大学での 2013 年度年会で JIR に関するパネルディスカッションが開催され，藤原さんは JIR 活動により得た数学研究だけからでは得ることのできない多くの知見を披露していた．普段の研究講演とはだいぶ雰囲気が違い，数学コミュニティの将来を真剣に考えておられる姿がなんとも頼もしかった．失礼を承知で申し上げるが，JIR 運営の経験に基づく確固たる信念をもって，順調にシニアに足を踏み入れたということだろう．

ところで，藤原さんは幾何学的群論の世界の第一人者の一人である．幾何学的群論は Dehn に始まる組合せ群論の延長線上にある分野で，Gromov が双曲群を発表して以降その名称が定着した．Gromov は「無限群論で重要なのは結果の出るクラスを見つけることである」と言ったが，その本質は，双曲群をモチーフにスマートなファジー化の提唱である．藤原さんの幾何学的群論の初期の仕事は有界コホモロジーに関することが多くを占め，準同型を擬準同型に広げて展開できるストーリーの豊富さを享受するものであったが，その延長でファジー化のアイデアを独創的に大きく広げ，3次元多様体論の JSJ 理論を模倣した群論における JSJ 理論の構築，および局所コンパクトではない空間への離散群の作用の固有不連続性の定式化とその応用についての貢献で，2005 年に幾何学賞を受賞している．その後の活躍も，たとえば MathSciNet を見れば誰の目にも明らかである．

こうした特筆に値する研究活動と JIR のようなアウトリーチ活動は一見異質のように見えるが，藤原さんの場合は容易に結びつく．研究が世界で認知されるにしたがい，多くの知人を得，様々な考え方を聞く機会が増え，それを肥やしに新たな展開が始まる．藤原さんはこうした流れに素直かつ柔軟に適応する．2006 年に開催された森田茂之さんの遺暦を祝う懇親会で，藤原さんから Jackson 女史を紹介された．実はその少し前に私は Oberwolfach で彼女を見ており，藤原さんもそのとき初めて彼女に会ったそうなのだが，その後が藤原さんと私の差で，藤原さんはどんどんコミュニケーションの密度を深め，数年を経て Notices に書評を書き，また JIR を立ち上げるに至った．

今回の藤原さんの受賞は，JIR 参加ジャーナリストからも賞賛の声が上がっている．数学研究者とジャーナリストの間にある壁がこれを機会にだいぶ取り払われることになると考えれば，真に文部科学大臣表彰に値する偉業である．文科省がこのような実績を評価してくれたこともうれしい．藤原さん，心からお祝い申し上げます．